

イギリス帝国と環境保護(2)

— クリューガー国立公園の成立 —

佐久間 亮

はじめに

1970年代に登場し、近年活況を呈している環境史は大きく次の三つの分野に集約することができるだろう。一つは、過去の自然環境を考古学的に復元しようとするものである。二つめは、人間の経済活動の環境への影響、とりわけ負の影響の規模を評価しようとするもの。そして三番目は、これともかかわるが、近代的な環境保護思想・運動が歴史的にいかに関わり合ってきたのかを検証するものである。⁽¹⁾これらの潮流の中で、近年とみに豊かな研究成果を生みだしているのが、第二、第三の分野にまたがるのだが、ヨーロッパ人の植民地支配が当該地の自然環境に及ぼした影響をどのように評価すべきにかかわるものである。

この帝国の環境史の中に、J. マッケンジーによれば、さらに四つの大きな潮流を見いだすことができる。⁽²⁾まず、15世紀以降のヨーロッパの拡大は環境変化（悪化）を地球規模で加速させる働きをしたとして、植民地支配を否定的にとらえる、比較的古くからある見方がある。このようないささか単純な見解に対して、近年、再検討の動きがめざましい。なかでも大きな影響を及ぼした研究として、R. グロウヴの『緑の帝国主義』（1995）⁽³⁾があげられる。これは17世紀から1860年という比較的長いスパンを対象としたものである。モーリシャス、セント・ヘレナおよび西インド諸島などの熱帯の自然の限界を目の当たりにしたヨーロッパの科学者たちは、人為的に環境を保全する必要性に目覚めた。これらの認識が、19世紀にいたって、インドや南アフリカでの環境保全の試みへと実を結んでいくとされる。とりわけ、イギリスによるインドの森林保護政策が再評価され、帝国の支配が必ずしも否定的にのみ作用したのではないことが強調されるとともに、環境保護思想と運動の出現を一国史的観点から説明し、さらにはヨーロッパ（あるいは北アメリカ）起源としてきたこれまでの研究にアンチテーゼを突きつけるものでもあった。

こうした見解に対して、第三の潮流は、自然環境の変化をヨーロッパ人が支配したわずか数百年の単位で捉えることに疑問を呈し、ことに屈伸性に富んだアフリカの自然環境の変動をより巨視的な視野から検討することを提唱するものである。D. アンダスンやJ. ジョンソンらの研究がその代表的なものであり、植民地支配の影響について、ポジティブであれ、ネガティブなものであれ、その過大枠をうち破り、さらには現代のグローバル・エンヴァイロメンタリズムの出現にも見通しをあたえるという点で、画期的なものである。しかしながら、それゆえにいささか、イデオロギー的あるいは科

学的側面が重視され、リアリズムにかける憾みをともなっていた。これに対して、植民地帝国における自然破壊、あるいは保護のプロセスを、本国および現地の文化的、政治的現実とのかかわりという、よりミクロなレベルにも目配りしつつ検討しようとする研究があらわれはじめた。その嚆矢となったのが J. M. マッケンジーの『自然の帝国』(1988) である。⁽⁵⁾

マッケンジーは、現在のアフリカにおける野生動物保護政策の歴史的起源をイギリス帝国の支配にもとめる。英本国（ヨーロッパ）の貴族・ジェントルマン文化の精髓であったハンティング文化は、19世紀の植民地支配とともにアフリカ植民地へと移植された。本国からジェントルマン・ハンターが当地に殺到し、かれらとともに植民地高官、軍隊もまたビッグ・ゲーム・シューティングに熱狂したがゆえに、世紀末には無尽蔵にみえたアフリカの自然の限界があきらかとなってきた。そこで、野生動物を今後も狩猟用動物として持続的に利用するために、ケープ植民地の保護立法をモデルとして各植民地に次々と保護法および野生動物保護区が設けられていったのである。これらの植民地時代の産物である広大な保護区が、植民地が独立して以降も存続し、現在、国立公園として、野生動物のみならず、生態系全体を保護する地として現在にいたっているのである。

マッケンジーの主張は、二重にパラドキシカルである。ひとつは、過酷な植民地支配こそが、人類の貴重な遺産の礎を築き上げたということであり、この点ではグロウヴらの見解に接近する。もう一つは、アフリカにおける野生動物保護政策・運動の起源を、保護とは裏腹の、ハンティングという「殺戮の文化」に求めたことである。ここで、マッケンジーの見解は、グロウヴらのそれと袂を分かつことになる。マッケンジー自身、グロウヴらの見解を「ネオ・ホイッグ的」解釈であると評したように、かれらには自然保護の必要性の認識の深化、自然への慈しみの共有から保護運動への飛躍を自明視する傾向がみられる。現代の環境保護主義の善悪二元論的なパースペクティブが投影されているといえなくもない。これに対して、マッケンジーの主張はよりリアリスティックであり、説得的である。

しかしながら、マッケンジーの研究もまた、単線的な二元論を共有しているともいえる。すなわち、植民地支配のもとで、殺戮のための保護（マッケンジーはこれを自然保護の preservationism の段階と表現する⁽⁷⁾）がおこなわれた段階から、国立公園の設立にみられるような、現代的な自然の生態系そのものの保護を目的とする段階（conservationism の段階）への展開はいかにして可能となったのか、この変化のダイナミズムが充分明らかにされたとはいえないのである。

現在、帝国の環境史の文化的・政治的コンテクスト化の試みにおいて、もっとも豊かな成果を生みだしているのが南アフリカ共和国の研究者たちであろう。⁽⁸⁾ここでは、かれらの研究成果の一部を利用しつつ、英領植民地の中で、もっとも先駆的に野生動物保護政策がすすめられ、また、最初に国立公園が誕生した南アフリカ（トランスヴァール）をケース・スタディとしてとりあげたいとおもう。その際、南アフリカの野生動物に深くかかわった一人の英国人の経験を中心に据えたいと思う。ジェイムズ・スティヴンスン・ハミルトン James Stevenson-Hamilton は、1902年、クリューガー国立公園の前身に当たるサビ保護区のゲーム（狩猟用動物）保護監督官に就任して以来、その国立公園化にもかかわり、47年まで当地の自然保護運動にかかわった人物である。彼が残した書簡、日記の一部を手評価を戒めようとするものである。⁽⁹⁾

これらの三つの潮流はいずれも、巨視的な視野から帝国の環境史を眺望し、それまでの一国史的な

がかりにして、とりわけ南アフリカの政治と環境史とのかかわりを明らかにしていきたいと思う。すなわち、南アフリカ（トランスヴァール共和国）の文化・政治状況に留意しつつ、マッケンジーの言う preservationism から conservationism の段階への移行のダイナミズムを探っていくことが小論の目的である。これをハミルトンが赴任した1902年（アングロ・ボーア戦争後、イギリスの直接支配が始まった年でもある）から、26年のクリューガー国立公園誕生までの過程を概観することで果たそうと思う。

注

- (1) 包括的なサーベイとして、以下を参照のこと。W.Beinart, "The Politics of Colonial Conservation" *Journal of Southern African Studies*, vol. 15, no. 2, 1989, W. Beinart, "Empire, Hunting and Ecological Change in Southern and Central Africa", *Past & Present*, no. 128, 1990.
- (2) J. M. MacKenzie, "Empire and the Ecological Apocalypse: the Historiography of the Imperial Environment" in T. Griffiths & L. Robin (eds.), *Ecology and Empire: Environmental History of Settler Societies*, 1997, pp. 215-28.
- (3) R. Grove, *Green Imperialism: Colonial Expansion, Tropical Islands Edens and the Origins of Environmentalism, 1600-1860*, 1995, W. Beinart, "Empire, Hunting and Ecological Change in Southern and Central Africa", *Past & Present*, no. 128, 1990.
- (4) D. Anderson & D. Johnson (eds.), *The Ecology of Survival: Case Studies from Northeast African History*, 1988.
- (5) J. M. MacKenzie, *Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Imperialism*, 1988.
- (6) J. M. MacKenzie, "Empire and the Ecological Apocalypse", pp. 221-2.
- (7) このマッケンジー独特の用法については、J. M. MacKenzie, *Empire of Nature*, p. 201 参照。
- (8) 南アフリカの環境史研究の活況については、以下の文献参照。J. Carruthers, "Towards an Environmental History of Southern Africa: Some Perspective", *South African Historical Journal*, vol. 23, 1990, pp. 184-195, F. Khan, "Rewriting South Africa's Conservation History-The Role of the Native Farmers Association", *Journal of Southern African Studies*, vol. 20, 1994, pp. 499-516. P. Steyn & A. Wessels, "The Emergence of New Environmentalism in South Africa, 1988-1992", *South African Historical Journal*, vol. 42, 2000, pp. 210-31. なお、南アフリカにおける研究の興隆は、『南アフリカ研究雑誌』の特集号 *Journal of Southern African Studies*, vol. 15, no. 2, 1989 が嚆矢となったと思われる。
- (9) James Stevenson-Hamilton Archives, Larkhall Record Office, Strathclyde (Lanarkshire) Folder: Hamilton of Fairholm, Diaries: 1879 to 1957. の一部を本稿では利用する。

—

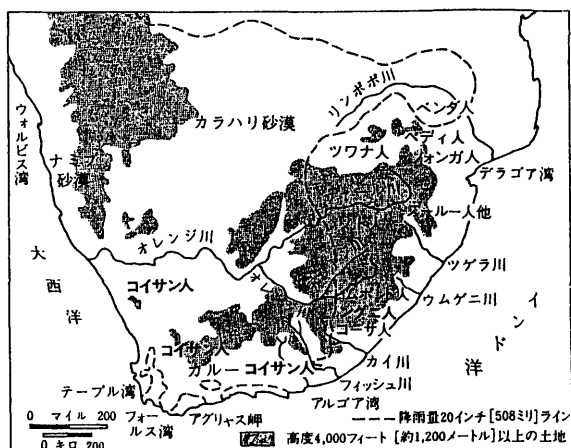
かつて、ケープ植民地は最西部の砂漠地帯を除いて、野生動物の宝庫であった。象、犀、カバ、バッファロー、キリン、シマウマ、クアッガ、さらには多種多様なアンテロープ類が生息していたのである。図1に見るように、年間降雨量20インチ・ラインの西側は栽培農業が不可能な乾燥地帯だった。だから、ケープに入植した最初の白人達が遭遇したのは、牧畜・狩猟民であるコイ・サン族であ

ったし、フロンティアの零細農民はトレック・ボーアと呼ばれ、その半遊牧型の生活のなかで、野生動物は重要な生活の糧であった。⁽¹⁾ オランダ系ボーア人にとって、ゲームの重要性は19世紀以降も変わらず、それは英系移民に圧迫されて1836年から54年にかけておこなわれたいわゆる「グレート・トレック」の時代には、より増していった。新たな土地に定着するまで、あるいはそれ以降も、それは重要な生活の資源だったのであり、この民族大移動とともに、ゲームのフロンティアも徐々に北上していったのである。⁽²⁾

民族大移動のさなか、早くも二つの野生種の絶滅の危機が叫ばれ、成立間もないトランスヴァール共和国の国民議会 volksraad においてボーア人による最初の狩猟法 game law が制定されている。この1846年の法律はイギリス系のハンター、商人によるハンティングを全面的に禁止することを目的としたものであったが、実効性に乏しく、より包括的な保護法が58年に制定されている。これもまた、その実効性に乏しいものではあったが、次の三点で際だったものであった。一つは、これがトランスヴァール共

和国全土に適用さるべき最初の保護立法であったということ。もう一つは、アフリカ人によるハンティングの制限を主たる目的としたものであったということである。アフリカ人によるハンティングは、サーヴァントとして、白人に伴われ、かつ通行許可証をもつもののみに認められ、それ以外のハンティングは一切禁止されたのである。さらに、この法には、白人私有地におけるハンティングを禁止する条項も含まれていた。アフリカ人のみならず、土地をもたないブア・ホワイトをもハンティングから疎外することが試みられたのである。⁽⁴⁾ これらの初期的な保護立法は、ゲームにアクセスしうる人種、階層を制限することで、資源としてのゲームを持続的に利用することを意図したものであった。

その後、1877年から81年の間、イギリスに一時的に併合されるという時代を経て、独立後最初に開かれた84年の国民議会から法の改正論議が再開した。この時の議論で目を引くのが、有料ライセンス制度導入の是非が審議されたことである。これは、トランスヴァール共和国の領内で、私有地如何にかかわらず、ライセンス所有者のみにハンティングを限定しようとするものであった。この時点で、ふたたび問題とされたのはハンティングに依存してきたブア・ホワイトの存在であった。かれらはフロンティアの消失により、これまでの半遊牧型の生活からの転換を余儀なくされつつあり、とはいえ耕作農民にもなりきれずに、ますます貧窮化していた。この法はそうした方向性を促進しようとするものであった。そして、かれらをハンティングから排除することで、スポーツの資源としてのゲームの保全が図られたのである。この法案の論議から読みとれるのは、明確にトレック・ボーアの伝統からの決別がはかられていること、いいかえればハンティングを特権者によるスポーツへと純化しようとする意志が働いていたことである。⁽⁵⁾ しかし、結局ライセンス制導入は見送られた。その理由は、ひとつにはそれが大土地所有者の私有地内でのハンティングという特権を侵害するものと受け止められ

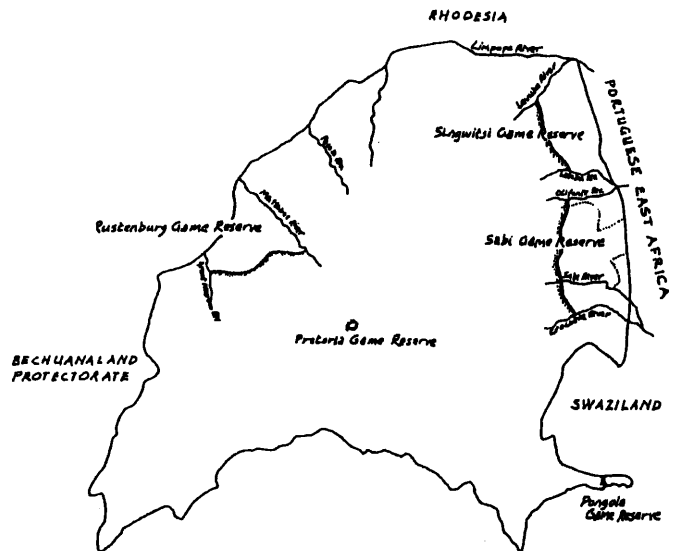
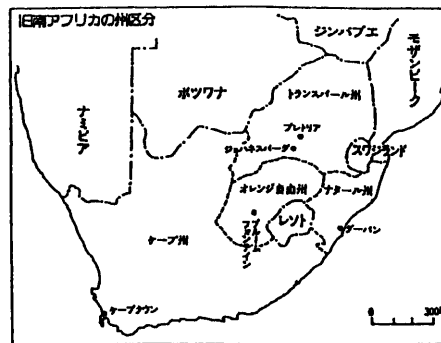


アフリカ南部

たこと、そして、なにより、広大な共和国の領内をくまなく、ハンティングを規制する法律を施行することの難しさが問題であった。

いっこうに効果的なゲーム保護の方策が示されないことに苛立ちを示したのはトランスヴァールゲーム保護協会 Transvaal Game Protection Association というイギリス系圧力団体であった。かれらの主張を国民議会で代弁したのが、P. クリュウガーの政敵でもあった英系議員のR. K. ラヴディである。かれはウィットワタースラントの金鉱に利害関係をもつ実業家であり、またスポーツマン (=ハンター) としても名高い人物であった。かれらは、ゲームの保護を実効的なものとするために、特定地域の野生動物を期限付きではあるものの、スポーツとしてのハンティングからも遮断する保護区の設立を求めたのであった。クリュウガーは自らも熱心なスポーツマンであったが、にもかかわらず、この要求に執拗に反対したばかりでなく、これまでの一連のハンティングの規制にも一貫して反対してきたのである。⁽⁶⁾

90年代のトランスヴァールは体内で急速に成長する異物である鉱山コミュニティをいかに体制に順応させるかに頭を悩ませていた。90年代半の時点で、英語をリンガ・フランカとする白人移民の男子数はアフリカーナーの男子人口を上回りつつあった。クリュウガーおよび国民議会はアイトラインダーに国を乗っ取られること、アフリカーナーの固有の文化が損なわれつつあることへの危惧を共有していた。保護区をもうけることは、スポーツとしてのハンティングを持続させること、それは、生きるためのハンティングというトレック・ボーアの伝統をそこなうことを意味していた。アイトラインダーが殺到してくる以前では、国民議会もこの方針を採用してきた。しかしながら、こうした方向性への世論の反対を背景にし



Transvaal Game Reserves, 1910

Carruthers, J., *The Kruger National Park: a Social and Political History*, Natal, 1995, p.50.より

て、クリューガーはここで断固とした反対の姿勢をしめしたのである。⁽⁷⁾

しかし、クリューガーの反対にもかかわらず、1894年にまずトランスヴァール南東のはずれに小規模なポンゴラ Pongola ゲーム保護区がつくられた。さらに、激しい論議の末に、95年9月6日、国民議会でもサビ Sabi 保護区設立の動議がかろうじて可決され、政府への設立勅告がおこなわれた。以後2年半、この勅告はクリューガーによって黙殺されたが、ついに98年3月26日、大統領令により、トランスヴァール東部のロウフェルト (lowveld =低地地方) に広大なサビ保護区が創られたのである。⁽⁸⁾ これは、国民議会の立法に基づかない、つまり大統領令により直ちに改変、廃止が可能であるという点で、法的基盤の脆弱な施設にとどまるものであった。とはいえ、トランスヴァール共和国は野生動物保護に向けて画期的な一步を踏み出したのである。この保護区がのちのクリューガー国立公園の雛形になったのであり、この施設はマッケンジーのいうように、イギリス系のスポーツマンたちの強い影響の下で現実化したのである。⁽⁹⁾ しかし、保護区の設立もつかのま、トランスヴァール共和国はイギリスとの戦争に突入することになった。

註

- (1) L. トンプソン (宮本正興、吉國恒雄、峯陽一訳)、『新版 南アフリカの歴史』明石書店、1998年、59-62、109-120頁。
- (2) S. Marks & A. Atmore (eds), *Economy and Society in Pre-Industrial South Africa*, 1980, pp. 313-49.
- (3) ブルー・アンテロープとクアッガが絶滅の危機に瀕しているとの報告がなされ、危機感を煽っている。これについては、J. Carruthers, *The Kruger National Park: a Social and Political History*, Natal, 1995, p. 8 参照。
- (4) *Ibid.*, pp. 11-2.
- (5) A. T. Cunynghame, *My Command in South Africa, 1874-78*, 1879, p. 281; H. Roche, *On Trek in the Transvaal*, 1978, p. 272; A. Anderson, *Twenty-five Years in a Wagon: Sport and Travel in South Africa*, 1888, p. 27.
- (6) トランスヴァールゲーム保護協会および、R. K. ラヴディについては、J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 25-7 参照。
- (7) クリューガー大統領の保護区設営に対する姿勢については、J. Carruthers, "Dissecting the Myth: Paul Kruger and the Kruger National Park", *Journal of Southern African Studies*, vol. 20-2, 1994, pp. 263-83 に詳しい。
- (8) J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 27-8.
- (9) J. M. MacKenzie, *Empire of Nature*, pp. 211-22.

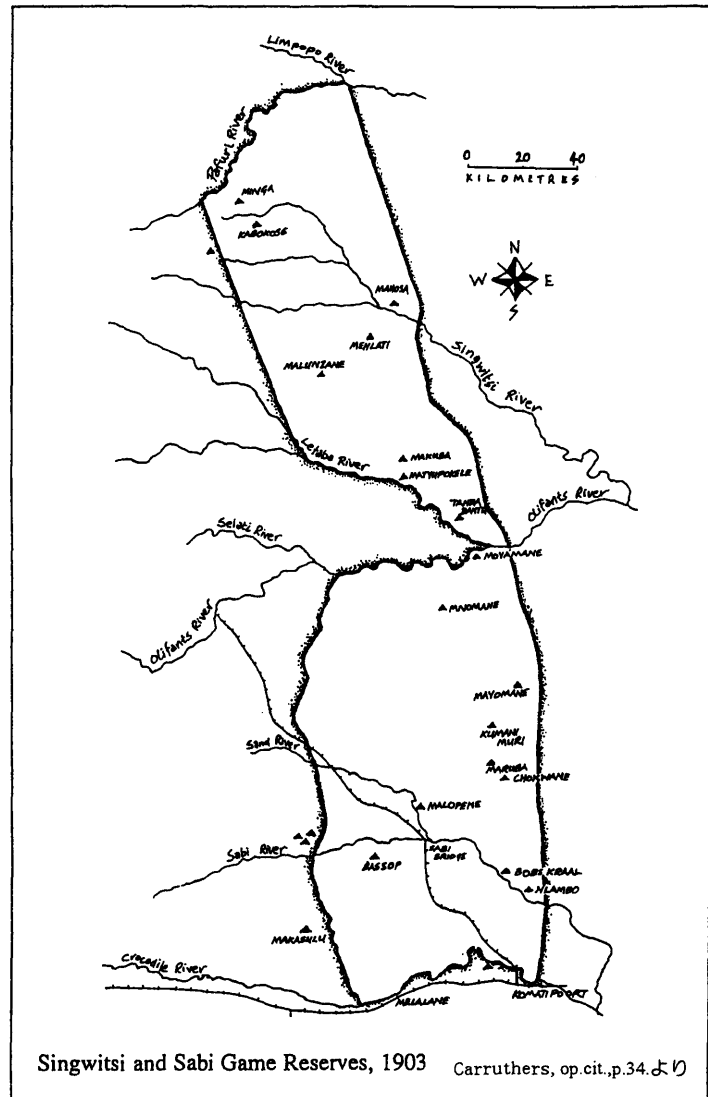
二

約4年にわたる激しいアングロ・ボーア戦争の結果、ボーア人の共和国は消滅し、英政府によるトランスヴァールの直接支配が開始された。そして、共和国末期に端緒が開かれた野生動物保護政策はイギリス人の支配のもと、着実な前進をとげることとなった。

1902年10月28日、植民地省はさっそく野生動物保護に関する省令を公布した。まず、あらためてア

フリカ人によるハンティングが全面的に禁止された。これは、野生動物の保護のみならず、原住民を金鉱業を中心とした労働市場へと組み込むこと、さらにはハンティングに依存する「野蛮な」生活から脱却させるための措置であるとされた。さらに、この布告は、保護されるべきゲームと、害獣として排除されるべき動物を区別し、保護区内におけるライオン、チータなどの動物のハンティングを解禁した。これは予めからのトランスヴァールゲーム保護協会の要求を受け入れたものであった。このことから、植民地省の狙いは、野生動物層全体の保護よりも、スポーツの論理を優先させることにあったことがわかる。さらに、植民地省は、この省令で、サビ、ボンゴラ保護区を再布告し、さらに翌年、西部にルステンブルク Rustenburg、そしてサビ保護区の北にシングウィツィ Singwitsi という二つの広大な保護区をつけくわえたのである。⁽¹⁾

これらの一連の政策に加えて、イギリス政府がおこなった保護政策の中で際立っていたのは、1902年7月、スティヴンソン・ハミルトンをサビ保護区のゲーム保護監督官に任命したことであろう。このスコットランド出身のジェントルマンは、グラスゴウ近郊の所領の相続者であったが、「強い肉体と規律正しさとをもとめる生来の性向」⁽²⁾ゆえに、ラグビー校から陸軍士官学校へと転身し、1880年、ナタール駐屯軍に勤務することとなった。アングロ・ボーア戦争勃発とともに、各地を転戦、戦後もイニスキリング騎兵連隊の将校として南アフリカに残る選択をしたのであった。かれもまた熱心なハンターであり、アフリカ勤務を希望したのも、19世紀半ばにイギリスでさ



かに出版されたアフリカでのハンティング冒険譚⁽³⁾の影響を受けてのことであった。かれはナチュラリストとしてもその名を知られる存在であり、ハンターかつナチュラリストという肩書きは、この時代

植民地へと渡っていったジェントルマン・ハンターに広く見られるものであった⁽⁴⁾。また、かれは英領アフリカおよびインドにおける野生動物保護政策が推進されるにあたって強力な圧力団体であった、帝国野生動物層保護協会 the Society for the Prevention of the Wild Fauna of the Empire⁽⁵⁾の有力なメンバーでもあった。これらの特徴から、かれはマッケンジーのいうように、ハンティングの文化をアフリカに移植した典型的イギリス・ジェントルマン・ハンターの一人だったということになるか。ただ、この時代にハンティング目的でアフリカに殺到した多数のイギリス貴族・ジェントルマンのなかで、彼の経歴を際立たせていることがある。それは、この植民地がイギリスの影響下から徐々に離脱していくプロセスのなかで、サビの保護監督官としてこの地にとどまり、生涯を野生動物の保護にささげたということである。

植民地省直属の監督官として、ハミルトンが手にした権限は巨大なものであった。保護区への一切の立ち入りについて、かれの許可が必要であり、この地における一般の警察業務、天然資源の採掘許可権から、ネイティブ関連の問題についてもあらゆる権限を与えられていたのである。1910年5月30日の南アフリカ連邦形成の前日に認めた日記には、帝国全体の貴重な財産を保護する者としての強い意気込みが記されている。そこには「帝国臣民」としての使命感と、英帝国のもとでこそ野生動物がよりよく保護されるのだという自負、またその裏返し、連邦化による保護区の将来への懸念が同時に表明されてもいる。

帝国の野生動物層は帝国全体の財産なのであり、偶然にその動物が息息する帝国の一部地域のみ財産などではないのである。それらは、ナチュラリストによる観察、スポーツマンによる正当な熱望を満足させ、そして、次の世代の公衆が見て楽しむためのものとして利用可能なものとしてあり続けなければならない⁽⁶⁾。

このようにして、「帝国の財産」は、イギリス政府の直接支配の下、また、イギリス人の有能な監督官のもと、着実にその領域を広げていったのである。この点で、たしかにマッケンジーが主張するように、アフリカにおける保護政策の基礎を築き上げたのはイギリスの植民地支配であったようにおもえる。しかしながら、ここで、二点、マッケンジーの主張について留保をしておきたい。ひとつは、この保護政策の基礎を築いたのが、かれのいうように、ハンティングという「殺戮の文化」のみだったのかという点である。先述のように、マッケンジーにとって、ハミルトンはこの地における「ハンティング文化」の担い手に他ならない⁽⁷⁾。しかし、ハミルトン自身の理念をこのように単純化してとらえることができるのかということである。そのことは、トランスヴァールゲーム保護協会とハミルトンとの対立にみることができる。

この対立は、次の問題を皮切りにして吹きだした。ハミルトンらの努力により、保護政策が一定の効を奏し、サビ保護区で哺乳動物の著しい増加がもたらされた。しかし、それが原因で、ライオンなどの害獣もまた増加し、周辺農牧場に深刻な被害がもたらされたのである。これに対して周辺入植者から不満の声が挙がった。これをうけて、協会は1905年の1月に総会を開き、スポーツマンによる害獣駆除のために保護区を開放するよう要求した。しかし、ハミルトンはこの要求を断固として拒否し

たのである⁽⁸⁾。その際、かれにとってのあるべき保護区の理想が示されているのである。すなわち、サビは保護区 preserve の地位にとどまるべきではなく、sanctuary へと脱皮すべきだとして、英系スポーツマン団体との対決姿勢を鮮明にしたのである。かれはその著作の中で、この二つの理念の相違を明確にしめしている。すなわち、特権的な少数者が利用するために、動物たちが保護されているのにすぎない保護区と、法により完全な不可侵性が与えられ、その土地の中では、将来にわたっていかなるハンティングも認められないサンクチュアリとである⁽⁹⁾。ハミルトンが「帝国全体の財産」の擁護を主張するとき、さらに「ロウフェルトの自然の守り神に一身を捧げる決意を固めた」と記すとき、そこにはすでに、ハンターとしてのハミルトンから、ナチュラリストとしてのハミルトンへの軸足の変化がみられるのである。かれにとって、もはや「帝国の財産」は、一部の特権的ハンターにのみ開かれたものであってはならなかったである。

もう一点は、次章以降で論じるように、サビおよびシングウィスティ保護区がクリューガー国立公園へと移行していくプロセスは、まさにハミルトンの理想の実現であった。しかしながら、これがイギリス人の支配のもとで、スムーズに生じたとは思えないということである。そのことを明らかにするためには、1910年の自治連邦化をへて、イギリスの影響力がしだいに弱まってくなかで、これらの保護区がいかなる運命を辿ったかを検討せねばならない。

註

- (1) J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 30-1.
- (2) James Stevenson-Hamilton Diary, 3 June, 1902.
- (3) 1850年代以降出版され、イギリス人のアフリカでのハンティング熱を極きたてた作品として、R. G. G. Cumming, *Five Years of Hunter's Life in the far Interior of South Africa*, 2 vols, 1850, W. C. Harris, *The Wild Sports of Southern Africa*, London, 1852, D. D. Lyell, *The Hunting and Spoor of Central African Game*, London, 1929. などがある。
- (4) かれのナチュラリストとしての声望を高めた論文に、“Observations on Migratory Birds at Komatipoort”, *Journal of the South African Ornithologist's Union* vol. 5, April 1909, pp. 19-22 などがある。また、帝国にわたったジェントルマンたちの二つの肩書きについては、拙稿、「イギリス帝国と環境保護－英領南アフリカにおけるハンティングと自然保護政策の起源についての覚え書き」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第5巻、107-119頁参照。
- (5) この団体については、R. Fitter & P. Scott, *The Penitent Butchers: The Fauna Preservation Society, 1903-1978*, 1978, さらには J. M. MacKenzie, *Empire of Nature*, pp. 211-22 参照。ハミルトンはこの団体の機関誌 *Journal of the Society for the Preservation of the Fauna of the Empire (JSPFE)* に多数投稿している。主なものとして “Game Preservation in the Transvaal”, *JSPFE*, vol. 2, 1905, “Opposition to Game Reserves”, *JSPFE*, vol. 3, 1907, “Empire Fauna in 1922”, *JSPFE*, part 2, 1922, “The Management of a National Park in Africa”, *JSPFE*, part 10, 1930, “A Game Warden Reflects”, *JSPFE*, part 54, 1946 などがある。
- (6) Stevenson-Hamilton, Diary, 30 May 1910.
- (7) J. M. MacKenzie, *Empire of Nature*, pp. 226, 229-31, 265-7.
- (8) このトランスヴァールのスポーツマンの圧力団体に対してハミルトンはしばしば嫌悪感を示している。Stevenson-Hamilton, Diary, 26 February 1903, 8, 22 June 1905. この衝突については、J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 41-2 に詳し

い。

(9) Stevenson-Hamilton, *Animal Life in Africa*, London, 1912, pp. 20, 27.

三

1910年6月、南アフリカ連邦が成立し、トランスヴァールは自治植民地内の一州へと姿をかえることとなった。連邦への移行は、連邦全体の政治的問題として、アフリカーナーとイギリス系住民との間のエスニックな対立を表面化させることになった。これは、ジョハネスバークの金鉱業、実業界で実権もつ豊かな少数派イギリス系住民と、オランダ系の地主・農民を中核とするアフリカーナーの対立であり、とりわけ、急速な近代化から締め出されたアフリカーナー・ブア・ホワイต์問題をめぐり深刻さを増していった。ルイス・ボータさらには、イギリス系移民の子孫で、ケンブリッジで教育を受けたヤン・スマッツらが率いる南アフリカ党は、両グループの融和路線を掲げ、イギリスからの漸進的独立という公約を掲げて、10年の総選挙で勝利を収めた。この勝利の背景には英系金鉱資本からの強力な支援があった。これに対して、ジェームズ・ヘルツォークを中心とするグループはアフリカーナーの文化的・経済的利益の擁護と、英帝国からの離脱を主張する国民党を14年に結成し、対立した。この対立の火種に油を注ぐことになったのが、第一次世界大戦への参戦の是非を巡る論争と反対派アフリカーナーの反乱であった。両グループの関係は悪化の一途をたどったのである。⁽¹⁾

こうした政治的背景の下、ハミルトンが危惧したとおり、トランスヴァールの野生動物保護運動にとって1910年代はまさに逆風の時代であった。保護区は連邦化により植民地省の管轄を離れ、州政府による管理下におかれることになった。これに伴い、ハミルトンの監督官としての権限も州政府の一行政官としてのそれへと縮小させられた。さらに、これらの土地は国有地からなるのだから、連邦政府の命令により、保護区指定の解除、縮小もまた可能なこととなったのである。こうして、ふたたび法的に基盤が脆弱化したうえに、保護区の存在は、イギリス・スポーツマンの文化とともに、その支配の象徴としてボーア人の反発の対象となりえたのである。さらにこうした理念的な反発に加えて、より現実的な問題が保護区の上にのしかかってきた。

まず、連邦政府レベルの問題として、第一次大戦からの復員兵が問題化し、これがブア・ホワイットの土地不足問題にさらに拍車をかけた。それに対応するために、早くも1914年に西部のルステンブルク保護区が廃止された。この保護区はそもそも農民の私有地を多くうちに含み、アフリカーナーによる反発がもっとも激しかったものであり、設立後わずか10年ほどで廃止の憂き目をみたのである。さらには、ボンゴラ保護区の廃止も10年代を通じて論議されつづけ、復員兵の定住地確保の目的で、ついに21年に廃止されている。⁽²⁾

こうして多くの保護区が攻撃にさらされるなかで、サビ、シングウィスティ両保護区もまた例外ではなかった。たとえば、1911年に、近郊アフリカーナー農民によって、サビ保護区南西部における伝統的な放牧権の回復運動が展開された。トランスヴァール州政府およびハミルトンは、農民による放牧と保護区の運営とは両立しないと判断し、これに応じた。しかしながら、保護区内に増えすぎた肉

食獣の存在が問題となり、これらを排除すべきか否かをめぐって論議は暗礁に乗り上げた⁽³⁾。さらに、サビ保護区にとっては、プア・ホワイト問題のみならず、大戦後にすすめられた東部トランスヴァールへの農業振興政策が暗い影を落とした。農業振興のために、この地域での労働力の不足が問題視され、連邦政府はこれに対応するために、1913年に定められた原住民土地法にもとづき、アフリカ人居留地をサビ保護区内に画定することを求めたのである。これは、のちの悪名高いホームランドの原型となるものであり、白人入植者の生活に適さず、かつ農業生産性の低いロウフェルトがその最適地とされたのである⁽⁴⁾。また、戦時中に、連邦政府の鉱山開発省内で、サビ保護区内での石炭、銅の採掘の可能性が論議され始めもした⁽⁵⁾。

このように、エスニック間の対立以上に、あるいはそれと結びついて、焦点となっていたのは限りある資源を保護区として使用することの合理性如何であった。農業、工業双方の近代化のもとで、資源を巡る争いが激化したのである。しかし、保護区が野生動物しか生息しえない不毛の地であれば、これほどまでの争点にはならなかっただろう。サビ保全運動の側からみた場合、不利に作用したのはこの時期に生じた自然環境の一時的な変化であった。それは1912年から16年断続的に生じた旱魃により、この地の沼沢地が減少したことである。これにより、マラリアの原因となるハマダラ蚊が減少したことで、ロウフェルトを農業用地として開発する可能性が議論されはじめたのである⁽⁶⁾。

さらに、もう一つ自然環境の変化が不利に作用した。サビ保護区と境を接する南のナタール州で、1909年以降ナガーナ病が大量に発生したのである。これはツェツェ蠅が媒介するトリパノソーマ原虫が引き起こす家畜の熱病であり、これが人間の場合、眠り病を引き起こすものとして、もっとも恐れられてるものであった。トランスヴァールおよびナタールでは、ナガーナ病は1896年以降影を潜めていただけに、この流行はパニックを引き起こした。ゲーム（哺乳類）が原虫の宿主であるとの説にもとづいて、ナタールおよび、トランスヴァールの北隣のローデシアでは、当時、保護区が相次いで廃止され、大がかりなゲームの殺戮がおこなわれていた。ハミルトンおよびSPFEは、現在では定説となっているこの説に反発し、これは本国植民省を巻き込んだ論争にまで発展していったのである⁽⁷⁾。ハミルトンらは、人間こそが原虫の宿主なのであり、限定されたツェツェ蠅の発生地域から人間を隔離することこそが最善の策だと主張し、保護区がこの病気のバリアとなりうるのだとした。しかし、すでに当時からゲーム宿主論の方が主流であり、保護区の存在がこの病をトランスヴァールへ引き込むことになりかねないとの危惧が優勢であった⁽⁸⁾。

サビ保護区存続に危機感を覚えたハミルトンは、この時点でさかんに連邦政府に働きかけをおこなった。とりわけ、ハミルトンと旧来から親交を結び、またイギリス系住民の利害のみならず、動物保護区の設立にもかねてから理解を示してきたヤン・スマッツは、に幾度となく書簡をおくり、その支持を求めた⁽⁹⁾。こうした働きかけにたいして、スマッツは保護区の一部をアメリカなどでその時期すすめられていたような、「ナショナル・サンクチュアリ」という「恒久的」な組織へと改編することを提案している。これはアメリカで、イエローストンをはじめとする国立公園がエコ・ツーリズムの場へと脱皮することで、大衆の基盤を確立しつつあった状況を踏まえての提案であるようにおもわれる。そして、すでに見たように、ハミルトンがかねてから主張してきたことと合致していたのである⁽¹⁰⁾。

中央政府からの働きかけもあり、1916年6月、トランスヴァール州議会はこの問題について調査委

員会を設置し、委員会は1918年に8月に報告書を提出している。その結論はきわめて明快であり、つぎの3点に要約することができる。まず、この施設は、人々が訪れ、自然の環境を観察する場として、また、科学を志す者を養成する場として生まれ変わるべきであること。野生動物のみならず、その生息する自然環境そのものが保護するに値する審美的価値のある空間であるということ。そして、もはや野生動物たちが「ハンターたちによって脅かされることのない」、ハンティングから切り離された施設となるべきことである。⁶⁰ 州政府レベルの委員会でそのような見解が主張されたのは画期的なことであり、ハンティングのための施設として生き延びていくことがもはや不可能であるという、スマッツ、ハミルトンの認識に沿った勧告だった。しかし、この画期的な報告を実現するまもなく、ハミルトン自身が戦時動員によりサビを離れ、また、戦時の混乱により保護区の管理システムそのものが崩壊してしまい、事態が新たな展開をみせるのは、ハミルトンが20年に帰任し、翌年2月にトランスヴァール州議会がサビ保護区をめぐる諸問題を解決するために協議会を開催するまで待たねばならなかった。

サビの国立公園化をすすめるうえで、この協議会のアジェンダは二つあった。ひとつは、保護区の西側の一部を削減して、アフリカ人居留地を確保するという。これについてはハミルトンも同意を示し解決した。⁶² 最後まで紛糾したのは、保護区内の私有地の問題であった。これは、国立公園化計画を推進するためには、乗り越えなければならない課題であった。土地の売却に最後まで抵抗した最大の地主は、トランスヴァール合弁土地会社 Transvaal Consolidated Land Company というジョハネスバークに本拠を置くイギリス系資本の会社であった。これに加えて、土地の補償問題に不満をとなえて、州議会に圧力をかけた団体があった。それはトランスヴァール土地所有者協会 Transvaal Land Owners' Association という団体であり、これはスマッツ率いる南アフリカ党の有力な支持母体であっただけに、ことはやっかいであった。⁶³

かれらが土地売却を巡って抵抗を見せたのには二つの理由があったと考えられる。一つは、この保護区の開発の可能性が高まったことで、同時に土地の投機的価値が高まったこと。しかし、それ以上に重要だったのは、国立公園化することで、将来的にこの土地の野生動物をハンティングの資源として利用することへの道が完全に閉ざされることへの危惧である。この団体は、もともとサビ保護区設立に尽力したイギリス系のスポーツマンの団体、ゲーム保護協会と人的に大幅に重なるのであり、かれらの目には、国立公園化は保護区本来の趣旨からのまったくの逸脱に他ならなかったのである。

サビ存続の危機に際して、イギリスのスポーツの伝統を払拭し、これにかわるあらたな合理性を主張して乗り切ろうとしたハミルトンらに対して、ここまで一連の論争を傍観してきたイギリス系団体が反対に転じたのである。協議会での論議の末、一時的に妥協が成立したかにみえ、首相のスマッツは、22年1月、次期の連邦議会に国立公園法を提案すると表明した。しかし、ふたたび土地所有者協会は土地の売却をしぼり、事態は如何ともしがたい状態に陥ったのである。この動きに対して、ハミルトンは苛立ちと無念さを日記に記している。⁶⁴ しかし、この膠着状態は、ハンティングのための施設という位置づけでもない、また審美的、あるいは科学的観点とも異なる、あらたな目的が提示されたことで、突如、予想もしない方向から突破されることになったのである。

註

- (1) L. トンプソン前掲書、280-83頁。
- (2) J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 48-9.
- (3) J. Stevenson-Hamilton, *South African Eden*, 1937, pp. 134-5.
- (4) 黒人労働者を鉱山への出稼ぎ労働者として編入し、かつかれらを低賃金状態に押しとどめておく方策が原住民土地法であった。居留地のなかで、アフリカ人家族に農地の保有をみとめ、なかば自給的な農業生産者世帯を形成させ、賃金以外の生活資料あたえることで、賃金を安く押さえることが可能となったのである。しかし、完全な自給世帯の形成を抑制しなければならず、そのために農業生産性の極端に低い土地をかれらのために確保する必要があった。それはアフリカーナー農民との土地をめぐる競合をさける措置でもあったが、保護区の確保という目的とは正面から競合するものであった。
- (5) J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 51. なお、14年の州令により、シングウィツィ保護区とサビ保護区は統合されて単一の保護区に再編されている。
- (6) J. Stevenson-Hamilton, "The Transvaal Game Sancturay", *Journal of the African Society* vol. 25 (99), 1926, p. 214.
- (7) Further Correspondence relating to the Preservation of Wild Animals in Africa", *Parliamentary Papers*, vol. LXVI (1910), pp. 275-6, 326-8.
- (8) この論争に関するハミルトンの見解は、Stevenson-Hamilton, "Tsetse Fly and the Rinderpest Epidemic of 1896", *South African Journal of Science* vol. 53 (8), 1957, pp. 216-8 参照。また、この論争全般の経緯については、拙稿、「英領アフリカにおける自然保護政策の展開—ウガンダ保護領1906-11年—」『立命館文学』558号, 1999年、822-6頁参照。
- (9) ハミルトンは、1911年9月12日付の書簡で、次のように記している。「現在、大型ゲームはもっとも危険きわまりない状態にあります。眠り病が現実には発生しそうな地域においてさえ、この病気はある種のパニックを引き起こしつつあるのです。〔中略〕そして、このパニックをゲームの駆除という目的に利用しようとするたくさんの輩がいるのです。」 Stevenson-Hamilton to J. Smuts, 12 September, 1911, Transvaal Provincial Secretary Correspondence Files, A1403/1, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 53 の引用による。
- (10) スマッツはトランスヴァールの行政官宛の書簡で、次のように記している。「いついかなるときであっても、家畜牧場を建設することで、その保護区〔サビ保護区〕の将来が危うくなるというゆゆしきおそれがあるようにわたしには思われます〔中略〕われわれの南アフリカの動物群を危機に曝すということは、まったくもって遺憾なことです。この念頭の目的を達成するためには、既存の保護区の一部を、合衆国や世界のその他の地域にある同様の制度にならって National Sanctuary として指定し、恒久的にその土地を除外して、この目的のために維持していくことが最良の方法であるという示唆がなされています。〔中略〕わたくしのこの見解の概要に関して貴殿の賛同が得られるのならば、最初の措置として、公平無私の委員会を任命し、当地の視察をおこなわせたいと思っております。」 J. Smuts to J. F. B. Rissik, 26 May, 1914, Transvaal Provincial Secretary Correspondence Files, TA3054, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 55 の引用による。
- (11) 勸告の内容は以下のとおり。「科学者、ナチュラリスト、それに一般の公衆が、この国の一部について熟知するために、より一層の便宜が提供されるべきことを当委員会は勸告するものである。その土地は、以下の理由ゆえに、かならずや自然への関心を掻きたてることになるであろう。
 - (i) ここでは、かつて連邦のより広い地域のいたるところでかつてそうであったはずの自然の環境をみたり、学ぶことができるであろう。そうした環境は文明の発達によっていまや急速に消え去りつつあり、また、いつかは完全に姿を消してしまうものなのである。

(ii) 科学を学ぶものたちにとっては、植物学であろうが、動物学であろうが、また他の分野であろうが、この地域はその養成場として他に比するところないところだといえる。

(iii) 都市の住人にとっては、この国の自然環境について知識を得るところか、ゲームや他の動物たちが徐々に、しかし着実に姿を消していつている状況のもとでは、動物園のような洗練された場所を除いては、この国の動物群を垣間見ることさえ困難になってきている。

(iv) ここは自然環境や南アフリカの動物群の習性についてありのままに学ぶことができる他に例をみない場である。この国の他の場所では、動物たちは狩猟家たちによって脅かされているので、本能的に自らの習性を完全にかえてしまっているが、ここではそのような影響は全くないのだから。」以上、*Transvaal Provincial Reports of the Game Reserves Commission*, 1918, pp. 9-10, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 56 の引用による。

(12) *Ibid.*, p. 58.

(13) *Ibid.*, pp. 58-9.

(14) ハミルトンは次のように記している。「利己的な資本家の利害についていつさい考慮すべきではない。〔中略〕かれらになり代わってわれわれがその財産を守ってきたのにたいし、沈黙のみをこととしてきたものたちを満足させるのに、われわれはあれこれ思い悩む必要などいつさいないのだ。」Stevenson-Hamilton, *Diary*, 4 December 1922.

四

この膠着状態を一変させるきっかけとなったのは、1924年におこなわれた連邦議会の総選挙であった。両エスニックグループの融和路線を掲げて15年にわたって政権を維持してきたスマッツ率いる南アフリカ党が、イギリスからの自立を求めるアフリカーナー・ナショナリズムを代弁する国民党に大敗北を喫したのである。

アフリカーナーのナショナリズムは、南アフリカ連邦の第一次大戦への参戦、その後の復員兵問題とプア・ホワイ問題の悪化をつうじて燦々してきた。そして、1922年のスマッツ政権による戒厳令の施行が引き金となり、急速に勢いを増してきていた。前年からの金の国際価格の低下に伴い、白人労働者のストライキが生じ、この事態に対してイギリス系鉱山資本は、賃金の高い白人労働者を黒人労働者に代替するという措置で対応しようとした。これに反対する鉱山労働者と警官隊との間での武力衝突という事態に陥り、戒厳令が施行されたのである。スマッツ政権は、この事件でイギリス系、ボーア系双方の鉱山労働者の支持を急速に失ったのである。⁽¹⁾

さて、国民党が地滑り的な大勝利をおさめたことで、ヘルツォーク政権のもとで、アフリカーナーの年来の要求が徐々に実現されていくことになった。たとえば、それまでの英語と並んで、アフリカーンスが公用語化され、聖書のアフリカーンス語の翻訳が試みられたことなどにそれはみられる。また、新たな国旗の制定をめぐるでも大論争が繰りひろげられ、けっきょく、ユニオン・ジャックと旧南アフリカ共和国旗の合成旗が作成されもした。⁽²⁾しかし、なによりも新政権が熱心に取り組んだのが、国立公園の設立運動だったのである。

なぜ、ナショナリズム運動と国立公園とが結びついたのだろうか。この運動は究極的には、イギリ

ス帝国からの離脱を目指すものであり、そのさい、抛りどころとされたのは、かつて祖先がイギリスからの自立をこころみた歴史的経験であった。すなわち、英雄時代としての、グレート・トレックであり、イギリスの支配からの自立を経験したトランスヴァール共和国の時代である。これらの時代を人々に想起させる装置として、まず指導者の存在があった。自ら幼少期にグレート・トレックを経験し、またかつての大統領として共和国の価値を体現する人物として奉りあげられたのがパウル・クリューガーその人であった。奇しくも、政権発足から間もない1925年はクリューガー生誕百周年にあたり、各地で記念式典が大々的に開催されたのである。⁽³⁾

クリューガーの存在とともに、もう一つ、人々に共有される記憶を呼び覚ますうえで必要な道具立てがあった。それはイギリス人によって略奪をされる以前の、かつて、トレック・ボーアたちがハンティングによって生計をたてた、豊かな野生動物に満ちた大地である。トレック・ボーアの伝統がことさら強調されたのは、これまで疎外され続けてきたブア・ホワイトの支持をとりつけるという側面もあっただろう。美しい国土こそが民族共有の財産であり、それが断片的なものであれ維持、復元されてきたのであった。そして、この二つの装置を結合させるために歴史が捏造されたのである。国立公園建設運動の先頭に立ったP. G. R. グロブラ国土庁長官は、国民議会でクリューガー生誕100年を記念して、次のような演説をおこなっている。

かつてトレック・ボーアたちがみたのと全く同じ、自然の景観を保持することは国民的責務であり、またポール・クリューガーの夢の実現なのであります。こんにち、われわれが国立公園の建設をおこなうのも、まさに、今は亡きクリューガー大統領の先見の明の賜物なのであります。⁽⁴⁾

このナショナリズムの象徴となる土地は、イギリス人によるハンティングの伝統から完全に切り離されねばならず、その起源もまたアフリカーナーに求められなければならなかったのである。

アフリカーナーのナショナリスト運動のもと、急速に盛り上がりを見せた国立公園推進の動きは、ハミルトンをはじめとするイギリス系住民にとっては、野生動物保護運動の「篡奪」に他ならなかった。かれらのこの運動への対応は様々であった。たとえば英系新聞である Rand Daily Mail は、25年11月21日付の社説で、この新たに創設されるであろう公園の名前として「ナショナル・ミルナー・パーク」を提案した。ミルナーこそ、アングロ・ボーア戦争ののち、ふたたびサビおよびシングウィツィの保護区化を宣言した人物だったからであり、この公園がイギリス帝国の伝統の上に築かれたものであることを鮮明に打ちだそうとしたのである。そのうえで、「国立公園の問題は政党間の政治上の取り引き材料であってはなら」ず、「国民の問題」だとして、英帝国の下での英系住民とアフリカーナーの統合の象徴たるべきだと主張している。⁽⁵⁾

ハミルトンの反応はより複雑である。かれは、危機に瀕していた保護区の存続をなによりも優先し、この時点では、アフリカーナー・ナショナリズムに棹さす姿勢を示したのである。かれにとって、保護区の存続にとって障害となりうるのは、イギリス系資本の利害であるとの認識をはっきり記しているのである。

ここで以下のことを指摘しておくことは重要でありましょう。すなわち、われわれには兩人種双方からの助力が必要だということ、しかしながら、この公園のもつ必要性と伝統とをよく理解しているという点で、オランダ語を話す人々はすでにわれわれの側にあるのだということ。しかるに、英語を話す人々に対しては十分に情報を与えた上で啓蒙する必要があるとわれわれは感じています。また、われわれにとっての予想される主な敵対者は、かれら、とりわけジョハネスバーグの一派 J'burg element のなかにこそ見いだされるでありましょう。このように考えることは有益ですし、そこにはたくさんの真実があるのです。ここまでのところ、われわれへの妨害は、私人のそれであれ公人のそれであれ、英語を話す人々によっておこなわれてきたのです。⁽⁶⁾

したがって、あらたに作り出される公園の名称についても、ハミルトンはそれがアフリカーナーの結集を促し、運動をすすめる上で有効であろうと判断し、「クリューガー」の名を冠することに賛同した。これが明らかに「創られた伝統」であることを認識しながらも、これに賛意を表明したのである。

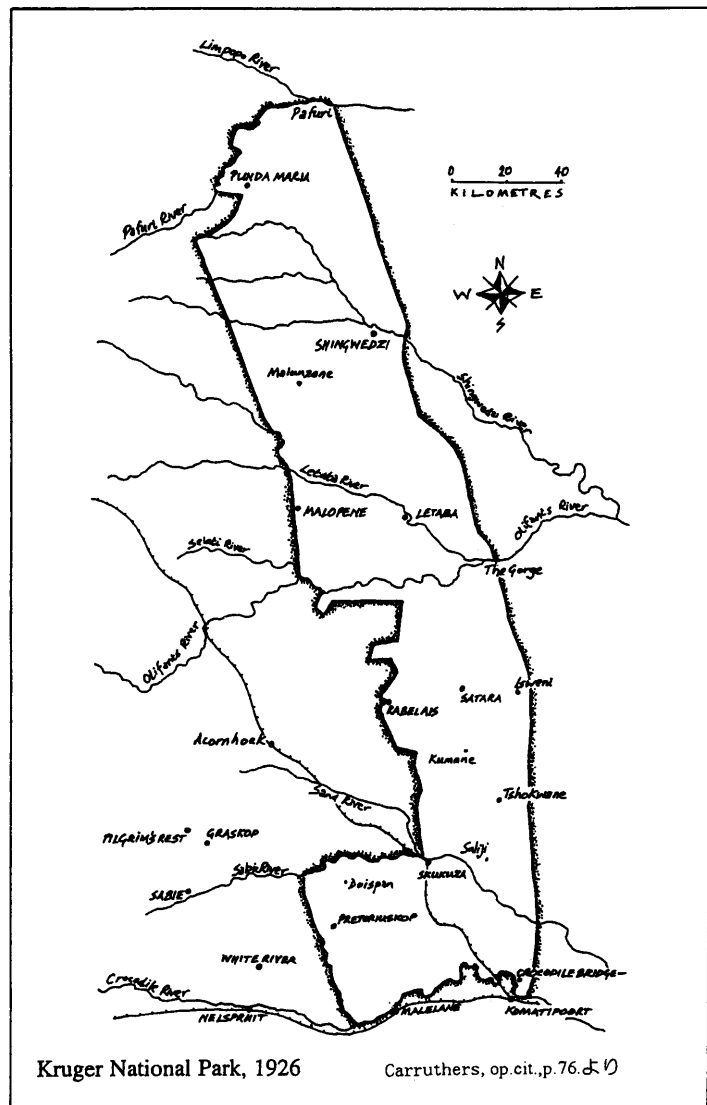
ことの張本人は、じつはラヴディ R.K. Loveday その人であります。しかしながら、クリューガーの名前のほうがはるかに人目を引くものでありますし、われわれにとって計り知れない価値があると思われる。かようなことはけっして公に口にするつもりはないのですが、ひそひそ声で話すくらいはしてもよからうとも思います。思いますに、かの老人は、その生涯において、一度たりとも野生動物を切り干し肉 biltong 以外のなにものとも思ったことはなかったでしょう。それは都会のスポーツマンたちの心を揺さぶるものであることくらいは認識していたでしょうが、〔それ以外にも〕いろいろな意味で重要なものであるなどとは露とも思わなかったような人物なのです。かれは、ラヴディらに強く迫られて、やむをえず保護区の宣言を認めたにすぎないのです。繰り返しになりますが、もしも自分が「南アフリカのゲームの救世主」と祭りあげられているということ知ったとしたら、かれはいったい何と言ったでありましょう!!!⁽⁷⁾

さて、国立公園の成立にとって障害となってきた土地の売却問題の行方であるが、英系の資本に好意的とはいえない政権が生まれたことで、土地所有者の間に動揺がうまれた。グロブラの提示した補償額は決して満足のいくものではなかった。しかし、土地所有者らは、新政権がこれ以上の交渉に望むつもりがないこと、まかり間違えば土地の没収という自体になりかねないことを察知した。ことにトランスヴァール合併土地会社は、これまで支持してきた南アフリカ党に幻滅を感じ、1925年末までには売却に応じたのであった。⁽⁸⁾

こうして26年5月から6月の審議をへて、クリューガー国立公園法は、両院を通過した。一州の布告にその根拠をもつにすぎなかった保護区は、全国法に基礎づけられたサンクチュアリへと脱皮に成功したのである。この法によって、将来にわたってこの地でのハンティングは禁止されることになった。⁽⁹⁾ イギリス人がもちこんだ文化からの脱却が宣言されたのである。ただし、法案の説明にあたって、グロブラはアフリカーナーのロマン主義的郷愁にのみ訴えかけたわけではない。かれは、繰り返しロウ

フェルト地帯が農業の不毛の地であることを強調し、そのうえでこの地を経済的に再利用することこそがこの法律の重要な目的であると強調しているのである。⁹⁸ その再利用の方法とは、この地を観光資源として徹底して利用することであった。グローブラは、年間1万人以上のアメリカ人をはじめとする観光客を予想し、100万ポンドをこえ収入を試算しているのである。これは、18年のトランスヴァール州議会調査委員会の打ち出した方向性を徹底したものであった。

しかし、経済的合理性のみが主張されたわけでもない。保護区という形態で、野生動物は人の立ち入らない空間に保護されてきた。このように守られた野生動物が将来的にハンティング



の資源として供せられるのか否かについて、論議があったことは既にみたとおりである。それがいずれに決着するにせよ、結局、貧しいアフリカーナーはこの地へのアクセスから排除され続ける運命にあっただろう。かれらはイギリス文化によって、トレック・ボーアの伝統からの断絶されてきたのである。しかし、これが国立公園として生まれ変わることで、ここはブア・ホワイも参加しうる土地となったのである。かれらこそ、トレック・ボーアの子孫とされたのであり、保護区やゲーム保護法のもとで一貫して排除されてきたかれらがアクセスしうる土地に生まれ変わったことの意義は大きい。とはいえ、それはかつてのように銃を携えて訪れる場所ではもはやなかった。民族の紐帯を確認する聖なる土地として厳かに訪れるべき場所だったのである。

註

(1) L. トンプソン前掲書、284-8頁。

- (2) T. Gutsche, *The History and Social Significance of Motion Pictures in South Africa, 1895-1940*, 1972, pp. 313-8.
- (3) I. Hofmeyr, "Popularizing History: the Case of Gustav Preller", *Journal of African History* vol. 29(3), 1988, pp. 521-35.
- (4) House of Assembly Debates Collections, 4366-7, 31 May 1926, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 58 の引用による。
- (5) Rand Daily Mail, 21 November 1925, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 62 の引用による。
- (6) Cape Archives (Cape Town), A848: Stratford Caldecott Collection, Stevenson-Hamilton to S. Caldecott, 23 May, 1926, J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 62 の引用による。
- (7) Ibid., Stevenson-Hamilton to S. Caldecott, 3 April, 1926.
- (8) R. G. Morrell, *Rural Transformations in the Transvaal*, 1983, pp. 238-9.
- (9) J. Carruthers, *The Kruger National Park*, p. 64.
- (10) Ibid., p. 63.

おわりに

こうして800スクエア・マイルもの巨大な野生動物のサンクチュアリが出現することになった。当初南アフリカ政府は8,000ポンドを拠出したものの、徐々に公園は管理委員会の下で、独立採算への道を探ることになった。この委員会は、公園の永続化を保障する目的から、特定の政府部局から独立した組織として設立された。しかしながら、設立の経緯からして、きわめて政治色の強い組織にならざるをえなかった。十人の委員中、与党アフリカーナー国民党の中心メンバーが三名、野党南アフリカ党から同じく三名、残り四名が政党外から選ばれた専門委員であった。しかし、専門委員四名のうち三人までが任期の5年を待たずに1年で解任され、いずれも国民党のメンバーによって取って代わられた。この「アフリカナイゼーション」のプロセスは、ハミルトンによると、1940年までに完了したという。⁽¹⁾

当のハミルトンは、国立公園法制定直後、一時的に監督官に就任したが、「アフリカーナーとイギリス人との確執から」辞職し、ロンドンへ移り住んだ。しかし、27年、管理委員会からの監督官就任の要請を受け、28年再び南アフリカへわたり、「公園内の管理業務一切について干渉を受けぬことを条件として」管理官に就任し、以降、47年5月末に突然解任されるまでその職を務めた。しかし、ハミルトンにとって在職中はけっして幸福な日々だったわけではなかった。その期間を通じて、委員会による干渉への不満と、そのメンバーに対する嫌悪感がその日記に綴られている⁽²⁾。にもかかわらず、かれは辞任後も南アフリカにとどまり、57年にその生涯を閉じるまで再びイギリスへ帰ることはなかったのである。

こうしたハミルトンのあまり幸福とはいえぬ境遇とは裏腹に、クリューガー国立公園はエコ・ツーリズムの拠点として着実に発展を続けた。これは同時に、イギリスの伝統を拭いさる歴史でもあり、そのために「熱心な自然保護論者」としてのクリューガーという、いまだに根強い「神話」の定着が

図られるプロセスでもあった。たとえば、長らく管理委員会副委員長を務めたラブシェンは、その著作の中でいささか感傷的な調子で次のように記している。

1898年3月26日、ポール・クリューガー大統領はサビ河とクロコダイル河の間の地域に野生動物のサンクチュアリを造る旨の布告にサインをした。これにより、大統領自ら、ある理念のために弛まず闘い続けた14年間に終止符が打たれた。それはしばしばかれを苦々しい論争に巻き込むものであった。1884年、かれが大統領に選出されてから一年後の時点で、ゲームが豊富なトランスヴァールで野生動物が絶滅の危機に瀕することになるなど予想したものなど誰もいなかった。しかし、クリューガー大統領の類い希な勇氣、信念、それに洞察力とがありとあらゆる困難にうち克つことを可能にしたのだ。かれの敵対者への勝利、それが、近郊で金の鉱脈が発掘されつつあり、恐るべき不安と無秩序が生み出され、より多くの権利を求める金鉱山労働者の代表者たち、手に負えないほどの、ありとあらゆる投機家の類やよからぬ輩の流入、ジェームソン一派の侵攻、ネイティブとの衝突などなど、ゲームのサンクチュアリが創設されてからわずか18ヶ月後にアングローボーア戦争に至らしめる様々な出来事が起こっていたその最中の出来事であっただけに、より一層注目に値するのである。もしも大統領がこのような危機的な時期に、サンクチュアリの布告を取るに足らぬことと考え、その公布を遅らせていたら、いったいどのようなことになっていたか、それは想像する他ないことである。14年間にもわたってクリューガーは野生動物のサンクチュアリという理念を提起しつづけたのである。ありとあらゆる議論において〔中略〕かれは熱心な保護論者であり、かれの見解へと多くの人々を「改宗」させえたのである。そうした人々のなかに〔中略〕R. K. Lovedayがいた。〔中略〕もしもかれの思い通りにことが運んだならば、クリューガー国立公園は1884年の時点で宣言されていたであろう。とするなら、これは世界で二番目の公園となっていたことであろう。〔中略〕自ら亡命という道を選んだそのときに、公園についてのあらゆる想念が、この尊敬すべき政治家の心を揺り動かす痛恨の情として迫ってきたのである。自らの乗る汽車がフロンティアに向けてゆっくりと動き出したとき、かれはその地域へと目をやった。そのとき、頭をたれた野生のイチジクと茨の木陰が、まるで儀仗兵のごとくにかれを見送り、野生の動物たちがそっと佇み、車輪の軋む音を聞いていたのである。⁽³⁾

同じくこの「神話」を普及させる上で大きな影響をおよぼしたメイリングは、その著作の中でハミルトンを評して、ゲーム監督官として「これ以上にふさわしくない人物を想像することすら困難」であるとしている。なぜならば、「かれはスコットランドの貴族であり、かつてイギリス軍の将校だったのだから。」⁽⁴⁾しかし、ハミルトンが「ふさわしくない」のは、ゲーム監督官という職ではなく、この「神話」にとってだっただろう。

クリューガー国立公園が、その原形であるサビ保護区の時代から、アフリカーナーたちの尽力に負っていたとするのは紛れもない「神話」である。マッケンジーのいうように、その起源はイギリスが移植したハンティング文化にあり、また実際に創設につくしたのも、英系入植者およびハンターたちの団体であった。しかし、将来的な消費のための資源保護の施設にすぎなかった保護区が、現代的な

国立公園という形へと脱皮しえたのは、アフリカーナーたちの運動に負うところが大きい。そして、マッケンジーの主張とはことなり、むしろイギリス帝国の影響力からの離脱の試みこそが、このことを可能にしたのである。とはいえ、このアフリカーナーの運動は素朴な自然への慈しみの情熱によって掻き立てられたわけでもなければ、アパルトヘイト体制下で書かれた国立公園史が主張するように、「普遍性を有する崇高な理念の勝利」であったわけでももとよりない。ナショナリズム運動という政治のダイナミズムこそがそのことを可能にしたのである。

したがって、クリューガー国立公園の歴史は南アフリカの政治史と切り離すことはできない。悪名高いアパルトヘイトを実施し、国際的な非難を浴びつづけてきた南アフリカの白人政権にとって、このサンクチュアリが数少ない宣伝媒体として機能してきたことにもそれはみられる。アパルトヘイトの体制から排除された黒人たちは、国立公園からもまた排除されてきたのである。白人のナショナリズムの涵養の施設として出発した国立公園が定義するナショナルの範疇に、かれらはそもそも組み込まれるはずはなかったのである。しかも、かれらが排除されてきたのは、ツーリズムからだけではなく、サビ保護区が設営された土地は、かつて白人による支配にもっとも頑強に抵抗したバンツウ系コーサ族の土地だったのである。かれらネイティブは白人支配の体制下で、国立公園から二重に締め出されてきた。野生動物のサンクチュアリはこうした排除の論理のうえに成立してきたのである。したがって、アパルトヘイトの体制が終焉した現在、かつて奪われた始祖伝来の土地について、いくつかの部族による補償訴訟が進行している⁽⁵⁾。クリューガー国立公園はいま一度の脱皮を迫られているのである。

註

(1) Stevenson-Hamilton, Diary, 30 October 1941.

(2) Stevenson-Hamilton, Diary, 17 June, 1927, 15 November 1944, 3 April 1945 など。

(3) R. J. Labuschagne, *The Kruger Park*, 1970, pp. 111-12.

(4) P. Meiring, *Kruger Park Saga*, 1976, p. 25.

(5) たとえば、ツォンガ Tsonga系マクレケMakuleke族は、1994年に制定された土地補償法 the Land Restitution Act にもとづいて、公園管財委員会に対して現在訴訟をおこしている。かれらは、少なくとも6世代にわたって生活してきた土地を1969年に強制退去させられたと主張している。他の事例も含めて、J. Carruthers, *The Kruger National Park*, pp. 97-8.